
オレニ天使はイラナイ

ガム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレ二天使はイラナイ

【Nコード】

N1288A

【作者名】

ガム

【あらすじ】

北條学園2年天崎刹那は無類の女好き。その所為で三つの呪いを受けてしまうことに

プロローグ

俺は北條学園高等部2年天崎刹那。無類の女好きで相当の煩惱の持ち主だった俺は横で美女とすれ違えば飛びついたり匂いかいだり思わず手を伸ばしているイタズラしていた・・・だが実際にやるのではなくすべて頭の中でやっていたのだ。この人並みはずれた煩惱を強靱な精神力と体力で押さえつけて何とか妄想で我慢していた。だがこの行き場を無くした煩惱は俺の肉体を離れなんと天界（天使や神が住んでいるところ）まで流れ込んでしまったのだ。天界はエネルギーが具現化しやすい所らしくとてもないエネルギーを持つ俺の煩惱は形を作りなんと天使たちにとんでもない猥褻行為を幾度となく働いてしまったのだ。そのおかげで俺自体は全然悪くないはずなのに天界での第一級犯罪者になってしまっていた。

俺の煩惱のエネルギーは何度倒してもすぐまた天界に流れ込んでいくらしく倒しても倒してもきりが無いらしい。そこで元を正せばいいと天使が俺を抹殺しに舞い降りてきた。そこで今までの話を聞かされた俺は

「俺には妄想する権利すらないのか!!」

と講義したところアッサリと

「ない」

って答えられてしまったのだ！なんて理不尽な……。だが殺すのはちよつと可愛そうだと神が言ったらしく何個か呪いを受けただけですんだ。だがこの呪いが酷いモンだった。

第一の呪い……。女の子に与えた刺激が何十〜何百倍にもなつて帰ってくる。つまり道で女の子に肩がぶついたりしたら相手はよるけるだけだがこっちは相手が感じた何百倍もの衝撃が体を襲うのだ、当然肩は骨折しまくりだ、まあこれは敵意がなければ発動しないらしい

第二の呪い……。俺に対してだけ女の子の力がこれまた何十〜何百倍にもなる。つまり今まではちよつとぐらい女の子に殴られても全然平気だったが今は背中を少し押されただけで相当に吹っ飛ぶ。

第三の呪い……。これが一番酷い。俺の深層心理に女性性は怖い生物だと刷り込まされた。怖くない怖くないと理性では分かっているのだが本能が怖がってしまうのだ。これらの呪いのおかげで幸か不幸か煩惱が弱まってきて天界の被害が減少したらしい。しかし事と場合によつてもっと呪いを増やすこともあるそうだ。

だが俺は女の子が好きだ。こればかりは何されようが変わらない。しかしこれだと彼女を作るところか女の子と仲良くもできないまさに生き地獄だ。

そこで俺は思った。呪いをかけてきた天使をぶっ倒してしまえば呪いが解けるのではないかと……。これでも体力と腕には少し自信がある。天使の一人ぐらい死ぬ気になれば倒せるだろう。しかし問題があつた、呪いをかけてきた天使が女の子の天使だったのだ……

しかも俺好きな
・
・
・
・
・
・

プロローグ（後書き）

「自分でもビックリ」の続きを書く気が起こらずこんなお話を書いてしまいました・・・「面白そう」「つまんなそう」「みたいに簡単なことでもいいので感想くれると助かります。よろしく願います

天使アルト

呪いをかけられた日から三日経った朝、窓越しに見える空は晴れ渡り、雲が美しい模様を描いている。それとは裏腹に憂鬱で夜も眠れず昼寝して学校にも行っていない。今日辺り登校しておかないと流石にまずい気がする。

この部屋には朝だというのに俺のほかに一人余計な人物がいた。俺に呪いをかけ張本人だ

「ってかさー、いつまで家に居座る気だよこのダメ天使」

「な、ダメ天使って・・・刹那って失礼な人間だね」

この天使の名前は「アルト」。なんでも天界屈指の呪術使いで1千以上もの呪いを扱えるらしく、神から俺を監視するように言われているらしい。でもなぜか俺の部屋にあるプロレスのビデオばっか観ている。

「おいそれはまだ俺も観てないビデオなんだぞ勝手に観るなよ」

「けっちな刹那は。でもやっぱりスポーツ観てるとスッキリした気分になるね、ボクも何か本格的にスポーツ始めようかな？」

コイツ自分のことをボクとか何とか言ってるがれっきとした女の子だ。金髪碧眼で髪が長くポニーテールにしているが腰辺りまで金髪が届いている。幼い顔して出るところは出てるんだよな……。体も無駄な脂肪が見当たらないし引き締まっていると思う。服装が驚く、白いワイシャツ一枚にジーパンと手の甲と手首だけを覆うを薄い皮のグローブこれだけだ、グローブなんか付けてストーリートフアイトでもする気かよは……

「言っとくけどなプロレスはエンターテインメントなんだよ。スポーツじゃない」

「何言ってるのさ？プロレスはスポーツだよ、ほら今だってバットとボール使ってミニ野球をしようとしてるじゃないか？」

「ミニ野球って何だよ？あのバットは凶器なの！あれで相手を殴るんだよ、悪役レスラーはリング場にいる時スポーツマンシップの欠片もないんだから」

「え、そうなの？野球でも始めるかと思ったのになあ……。そうだ刹那プロレス技かけさせてよ」

とか言いながらこちらに近づいてくる

「断る！いいかそれ以上に近づくなよ！俺に触れるなんてもつての他だ！呪いの所為で3メートル以内に女の子が近づいただけで鳥肌

が立つのに・・・触れられたりしたらどうなる！？きつと気絶するぞ。しかもプロレス技？殺す気が俺を！」

呪いのおかげで女の子から俺へのパワーが数十倍から数百倍になる。そんなんでプロレス技食らったらカウントを数えずにお陀仏だ

「いいじゃんいいじゃんお願いだよ」

「そっいうのはなあレスラーが健康な呪いを受けてない人に頼め！」

「何だよケチ！ケチケチケチケチ刹那のケチ！」

「ケチで命が護られるなら俺はいくらでもケチになるぞ」

「あーそーですか！もういーよー！ずっとビデオ観てるから！」

「何すねてんだよ・・・」

ホント何なんだこの天使は？俺に呪いをかけた凶悪（？）な奴の癖して親しげに話しかけてくるし・・・何もしていなければすつごく可愛いんだけどな・・・今だって正座しながら真剣な表情でプロレス観てるし（笑）・・・髪の毛なんか陽の光が当たるとキラキラ輝いて昼間でも光る星のようだし。

.....

「ちょっと！さっきから何ジーっとボクのこと見てるのさ！さてはボクでエッチなこと想像してたでしょ！」

フツと我に返る。俺そんなにジーっと見つめてたのか？.....

「なーに安心してくれ俺は子供には興味ないんだ」

とりあえず適当に流す。もちろんアルトをお子様だなんて思っていない。

「なに！？子供扱いしないでよ！！」

それが逆鱗に触れてしまったらしい

アルトは怒った様子で勢いよく立ち上がった。そのため反動でプルリンと激しく揺れた胸を俺は条件反射でつい凝視してしまった。ボタンをちゃんと閉めていないシャツのため揺れた拍子に谷間が見える.....しかも一着しか着てないから形がなんとなくだが分かった。やっぱり結構大きめのサイズだ.....ってか下着ぐらい付けるよな.....

「あゝっ！！やっぱり胸ばっか見てるじゃないか！刹那の変態！これじゃまた天界に被害が出ちゃうじゃん！」

「そんな事言われてもなあ……」

呪いをかけられて女の子が恐怖に感じてしまっはすなのにそれでも胸に反応するなんて我ながらいい度胸だ

「こーなつたら呪いを増やすしかないね！三つじゃ刹那には甘かったんだよ！」

何！？呪いを増やす！？冗談じゃないぞ！これ以上得体の知れないモン増やされてたまるかよ

「い、今は悪かったよ。ゴ、ゴメンナサイ……」

俺は誠意を表すために深々と頭を下げた。

「……よし今だ！」

と、突然アルトは頭上から俺の腰に腕を回し俺の体を宙に持ち上げた。

「っておい！！何すんだよ！？離せ！！」

「あんな真面目に謝っちゃって・・・刹那は面白いなあ。ボクだって子供じゃないんだからそんなすぐ本気で怒ったりしないよー」

「な・・・だつたら今すぐ子の手を離せ!!」

「やーだよつ。一回やってみたかつたんだもんパワーボム」

パワーボムとは相手の腰を掴み一気に持ち上げこれまた一気に床に叩きつける極悪技である

「そつれーえつ!」

俺は勢いよく振り下ろされ頭から床に衝突した。床が砕け俺の体が半分床に埋まってしまった。コンクリート造りの家のはずなのにとんでもない威力だ。俺の体を通じただけでこれほどまで破壊力が上がるとは・・・俺もそろそろ意識を保つのが限界だった

「うあわ・・・ゴメンゴメンちよつとやりすぎちゃった・・・。ちなみに怒ったのは嘘だけど呪いを増やすつてのは本当だからね。刹那には悪いけど呪い三つじゃまだ足りないみたいだからさ」

ちよつとやりすぎでこれかよ・・・もうなかばどうでもよくなってきた・・・普通の人間だったらもう死んでるぞこの状況は・・・

・体鍛えてて本当に良かった良かった・・・

って呪いを増やすって言うのは嘘じゃなかったのかよ！

天使アルト（後書き）

執筆中は楽しかったのですがいざ出来上がってみると何だこれ？って感じになっちゃいました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1288a/>

オレ二天使はイラナイ

2010年10月31日11時37分発行